

子どもに学ぶ楽しさと自他理解をもたらす協同学習の実践に関する研究
—協同学習を不登校予防に向けた実践方策の一つとして位置づけるために—

教育実践高度化専攻
心の教育実践コース

P11044C

西田彩夏

第1章 問題の所在と目的

不登校児童生徒数は、平成10年度から22年度にかけてほぼ横ばい状態が続いている。今後の対策は既存の、いわゆる「事後対応」に留まるのではなく、学校現場において未然に防ぐ方法が必要となるのではと考えられる。その方策の一つとして、本研究では、協同学習に焦点をあて、その有効性について提案することとした。

第2章 不登校予防に向けた理論

本研究における不登校児童生徒の捉え方やアプローチについて明らかにするため、不登校に関する先行研究を概観し、2つの捉え方を提示した。不登校の要因を個々人というミクロな対象に捉える立場と、社会的背景というマクロな対象に捉える立場である。本研究の目的は学校現場における予防であるため、後者の立場を採用することとし、森田(1991)の「ボンド理論」に基づいて研究を進めることとした。ボンド理論では、生徒と学校をつなぐ4つの領域が存在し、各領域が弱まる程に生徒と学校のボンドは薄れ、不登校傾向が高くなると仮定される。4領域とは「対人関係領域」「手段的自己実現領域」「コンサマトリーな自己実現領域」「規範領域」である。したがって、これら4領域を強固なものにすることで、不登校予防につながると考えられる。

第3章 不登校予防と協同学習の関わり

ボンド理論における4領域を増加させる手立

てとして協同学習を提案した。協同学習の定義を「協同学習とは、子どもが、協力を必要とする課題遂行を通して、主体的な学びの態度、幅広い知識、仲間と共に課題解決に向かうことのできる協力的態度、さらには、他者を尊重する民主的な態度といった力を効果的に身につけていくための基本的な学習方法を言う。」と定義した上で、ボンド理論と協同学習の関連について論じた。1つは、協同学習において設定されるねらいは、生活諸領域との関連性が高いこと、もう1つは、学校生活の中心に位置する授業での継続的な取組が、不登校予防に効果を表すと考えられることである。

第4章 協同学習を予防方策の一つとするために—岡山県総社市の取組から—

実際に不登校予防を目的として取組を行っている岡山県総社市の中学校を訪問し、その実践について考察した。総社市では協同学習をはじめとする多くの取組を複合的に行うことで効果を発揮している。また、市全体で取り組んでおり、各校種との情報交換や連携がなされていた。しかし各取組に対する意識付けが不徹底であり、ねらいが児童生徒に明確化されていないが為にその効果を十分に発揮できていないという課題も見られた。そこで、協同学習をより効果的な方策と位置づけるためには、児童生徒自身に協同学習の意味・意義を意識化させるような事前授業を行う必要があるのではないかと考えた。

第5章 実践の具体

協同学習を長期にわたって継続的に行っていくことを前提にした、事前学習の内容と方法を考案・を実施した。予備調査として、①対象学級の観察、②日記帳や宿題を通した分析、③大学生に対する模擬授業の実施、の3点を行い、これらの考察をもとに実施上の留意点について検討した。実践内容は、協同学習を体験することを学習のねらいとした第1時、そして前時を踏まえて協同学習の意義を考えさせることをねらいとした第2時の計2時間とした。第1時は構成的グループエンカウンターより「無人島SOS」を用い、第2時は前時の児童の感想を用いてKJ法を行った。

第6章 結果と総合的考察

①質問紙調査から見た結果と考察

長濱・安永・関田・甲原(2009)の作成した共同作業認識尺度から4項目を選び出し、プリ・ポストデザインによる質問紙調査を行った。その結果、全ての項目において有意差は認められなかった。また、杉江(1999)の作成した授業への満足度質問紙についても6項目を選び出し、統計的検定により分析したところ、1つの項目を除くすべての項目で有意に低下した。これは、第1時と第2時の課題性の違いが主要要因と考えられる。

②「一日一善アンケート」から見た結果と考察

児童がどのような行動を「良いこと」と感じ、実行しているのかについて自由記述式の調査をプリ・ポストデザインで行い、その結果を、「遊び」「学習」「掃除」「無し」「その他」の大きく6種類のカテゴリーに分類、集計した。その結果、プリテストでは多かった「遊び」「掃除」の項目の割合が減少し、代わりに「学習」「その他」が増加した。「学習」では、教えることや教えら

れることに肯定的な認識を抱いた児童が増加した。今後の継続的な指導により学習への意欲増加や児童の相互作用による理解促進が図られ、コンサマトリーな自己実現領域や手段的自己実現領域が強固になることが予想される。また「その他」では事前授業において設定した話合いのルールについて意識した記述が見られたことから、事前学習で話合いのルールを設定することにより、児童の対人関係に貢献することが確認出来た。

②授業の感想から見た結果と考察

第1時では「皆に賛成してもらおうとすごく気持ち良いことがわかった」等の感想があったことから、設定したねらいが達成されたことが伺える。また、この感想からは、他者に意見を認めてもらうことの嬉しさが、対人関係領域やコンサマトリーな自己実現領域の増加に繋がっていることも伺えよう。第2時では「話合いは大切だということが分かった」など、協同学習の意味・意義を児童自身が感じた様子から、事前学習のねらいが達成されていることが伺える。事前学習を踏まえ、継続的に協同学習を行うことで、より一層効果のある不登校予防の方策となり得ると期待できるだろう。

しかし、課題も残る。協同学習による関係性の悪化がその代表的なものと言える。これには教員のファシリテート能力が大きく関与していると思われる。今後、より一層の効果的な取組にするためには、児童のみならず、協同学習の継続的实践による教員のスキル向上が求められることになるだろう。

修学指導教員 山中 一英
指導教員 山中 一英